

社会教育指導員の部屋

2023.1月

生涯学習課 社会教育指導員 吉澤 隆

人権感覚を子どもと共に

今年も12月15日に、望月公民館の「市民ふれあい学級」で話をする機会をいただきました。

今年は、大人の皆さんに、子どもにとっての人権感覚はどのように捉えたらよいか考えて、話をさせていただきました。

人権の問題は、法務省人権擁護局では17項目に分類されています。今日はその中から、テーマを絞って、性的指向や性自認についての人権、差別や偏見を無くすためにできること、そして、中世頃から続いている「ケガレ」と「きよめ」の概念から起こる歴史的な差別に触れさせていただきました。



【性的指向や性自認についての人権】

LGBTQ の話題は、どの位認識されていて、どのように考えられているのか、参加された皆さんにお尋ねし、子どもの場合はどのような心配があるのか一緒に考えていただきました。色々な調査で差はあるものの、現代は概ね7～8%位の人が「性」に違和感をもっていると言われていています。小中学校で40人学級とするなら、クラスに2人から3人という状況です。決して少ない人数とは思えません。

今年度の夏の教職員研修でも、佐久市内の小中学校の教職員と高校の先生方を対象として性の多様性の講演を聴講させていただきました。トイレ、プール、健康診断などの際に困っている子どもが居るかもしれません。ランドセル一つとっても、男の子は「黒」、女の子は「赤」という時代ではなくなっています。

【差別や偏見を無くすためにできること】

次に、差別や偏見を無くすためにできることとして話をさせていただきました。差別や偏見は日常頻繁に起こる人権侵害ですが、これを完全に解消することは難しいと言われてしています。

偏見の発生は、一説に「脳の省力化」から起こると言われています。血液型、国籍、男女など、自分の固定概念が差別につながる、つまり自分の脳内で単純化した考えがその原因であるというものです。

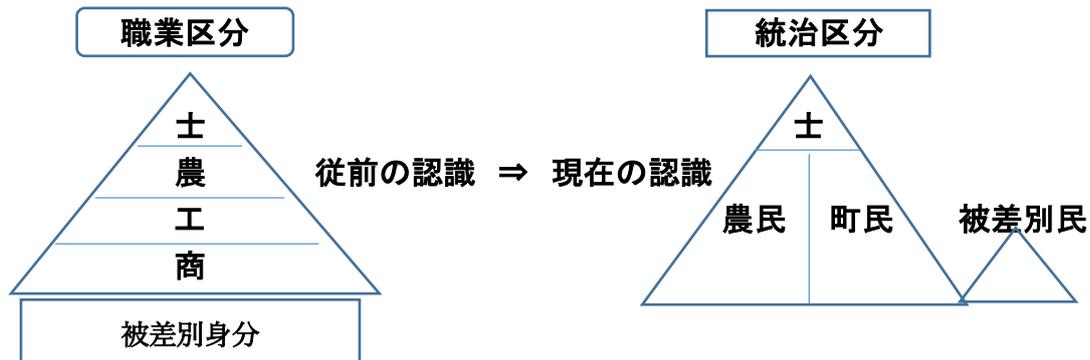
また、学校内での「いじめ」を考えてみたときに、被害者と加害者の関係だけではなく、加害者を取り巻く聴衆、クラス内の無関心な傍観者、これが加害者の三重構造であると言われてしています。被害者には、その他の全ての人が加害者と同等に見えて、「孤立」化し、「無力」化することで、次第に見えなくなり「透明」になって、更に孤立感を深めていくというサイクルになるというものです。

これを防ぐためには、加害者を無くすことは重要ですが、被害者にとっては友達などが寄り添い、先生や家族などが直接または間接的に支えて、差別のサイクルを断ち切ることで被害者を救うことができると言われています。

【中世頃から続いている「ケガレ」と「きよめ」の概念から起こる歴史的な差別】

最後に、同和問題の差別の起こりは、中世以降の「ケガレ」と「きよめ」の関係にあり、「きよめ」に従事した人々や、ケガレとされている作業への職業差別の一面も持っているのではないかとされています。「ケガレ」の起こりは更に古く、「魏志倭人伝」では、人の死に対して10日間喪に服し、その間肉を食べず、葬った後に水辺に至って沐浴をしたと言われてしています。神話の時代から、中世、近世を経て、日本人の持つ独特のケガレ感、自然に手を加えることへの恐れ、人外のものへの恐れ、血のケガレなど様々なものへの恐れの気持ちがありました。

【江戸時代の歴史認識について】



明治維新の「四民平等」「解放令」から150年余が過ぎ、大きな戦争を経て、2016年に施行された人権3法の一つ「部落差別の解消の推進に関する法律」が施行されても、インターネット上には、小諸市と佐久市の部落差別につながる地域情報が載せられました。これに対しては、小諸と佐久の市長より法務局へ、この情報の削除の要請が行われました。

学術的研究や表現の自由を理由にしても、個人の人権侵害になることをインターネットで拡散させること、また、金儲けの手段にすることは容認できません。

これらの内容を「市民ふれあい学級」で、参加者にいっしょに考えていただくテーマとして提供させていただきました。

これからも地域公民館や様々なグループの中で、人権問題に触れる機会が広まっていくことを期待しています。



講演にあたっては、法政大学 金子匡良教授、元大阪市立大学 上杉聡名誉教授、京都産業大学 灘本昌久教授、桃山学院大学 寺木伸明名誉教授ほかの講演、雑誌への投稿を参考にさせていただきました。